

KAZUMOちゃんで学ぼう!



ねづ  
じょせい  
留萌に文化を根付かせた女性

たでぬま  
蓼沼ナヲ

# 目次

はじめに	1
ナヲ新天地へ	3
ナヲの子ども時代	5
「紫英」を名のる	7
やまとえんしゅうりゆう 大和遠州流との出会い	10
てんかんき 人生の転換期	12
めいじ 明治43年(1910)の留萌	14
留萌での生活	17
いっしょ トミと一緒に	18
けいしょう ナヲ家元を継承	21

留萌ホテルの坂道	23
戦争の時代へ	25
娘トミへ家元継承	28
留萌茶華道連盟英会の結成	30
留萌市文化賞第一号受賞	33
念願の絵の個展を開く	36
大和遠州流の未来を見つめて	38
大往生	39
その後の大和遠州流	41
おわりに	45

たでぬま  
**蓼沼ナヲ物語**



# はじめに

みなさんは、大和遠州流という茶道を知っていますか。

おもてせんけ うらせんけ りゅうは  
表千家や裏千家など茶道にはいろいろな流派がありますが、大和遠州流とは、千利休(※1)の高弟の古田織部の弟子であった小堀政一(遠州)(※2)の三男小堀政伊に始まる小堀権十郎家に伝わった茶道です。

とくちょう せんのりきゅう くわ  
茶道の特徴は、千利休が始めた「わび・さび(※3)」に加え、茶室や庭の構造、茶道具の取り合わせや掛け軸の選択など、茶事に関わる全てに遠州の美意識を反映させた「綺麗さび」にあります。

せんのりきゅう  
全て千利休が広めた茶の湯から出てきたのです。

## ※1 千利休

あづちももやま さかい そうし とよとみひでよし  
安土桃山時代の堺の商人。茶の湯を創始し、豊臣秀吉に仕える

## ※2 遠州

げんざい しづおかげん  
現在の静岡県

## ※3 わび・さび

しつそ しづ  
質素、静かなもの

りゅうは ほんきよ  
この茶道の流派が一時期留萌に本拠をおき、留萌の文化

はってん こうせき  
の発展に功績がありました。

すいしん じょせい  
これを推進したのが一人の女性でした。

かのじょ かどう うたい しまい  
彼女は茶道のほか、華道、絵画、書、謡（※4）、仕舞（※

ばんけい ぼんせき たさい およ  
5)、盤景（※6）、盆石（※7）など多彩に及び、昭和28年（1953）

しんこう きよ ひょうか  
留萌の文化の振興に寄与したことが評価され、留萌市で

さいしょ しよう じゅしょう  
最初となる留萌市文化賞（※8）を受賞しています。

かのじょ たでぬま  
彼女の名は、蓼沼ナヲといいます。

※4 謡

のう せりふ うた  
能の言葉や台詞の部分を謡うこと

※5 仕舞

のう しうぞく ま  
能の装束を着けずに舞うこと

※6 盤景

すいばん しそん ふうけい  
水盤の上に自然の風景のミニチュアを作るもの

※7 盆石

しぜん ひょうじょう ほんじょう えが  
自然がおりなす様々な表情を盆上に描くもの

※8 留萌市文化賞

しんこう とく きよ だんたい おく じょう  
留萌市の文化振興に特に寄与した人、団体に贈られる賞

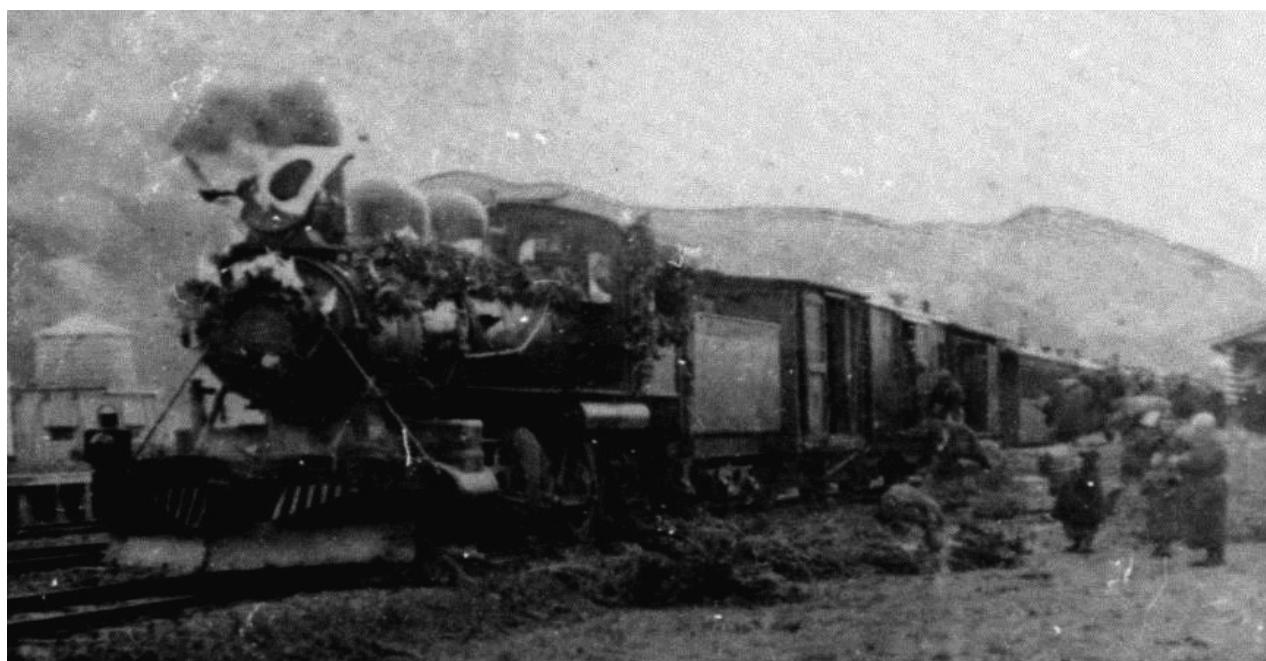
## ナヲ新天地へ

---

めいじ  
明治43年(1910)11月22日、3人の子どもを連れた  
ふじん　かんせい  
1人の婦人が完成したばかりの留萌駅に降り立ちました。

ふかがわ  
明日は深川から留萌の間に一番列車が走る留萌線開通  
の日となっており、駅はその準備を急ぐ人たちでざわめいていました。

そな　しうんてん  
明日の本番に備えて、試運転をしていた列車に乗り込み  
留萌にやってきたのです。



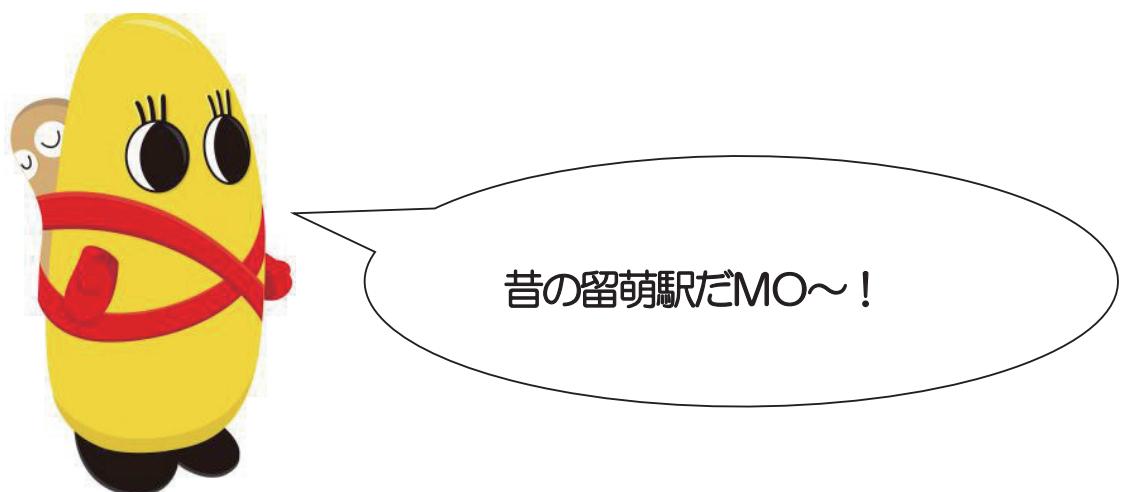
留萌線開通日の一番列車

待ち受けていたのは、料理屋を留萌で経営している兄の  
日下部主計と染め物屋をしている弟の佐藤彦太郎でした。

兄と弟の姿を見つけると、今まで張りつめていた気持ちがすっとゆるみ、自然と笑顔になっているナヲでした。



留萌線開通時の留萌駅



# ナヲの子ども時代

たでぬま  
蓼沼ナヲは、明治4年(1871)漢学者(※9)で僧侶の父

さとういちたろう  
佐藤市太郎と母マサヲの長女として山形県に生まれました。

ころ  
ナヲは子どもの頃から絵を描くのが上手で、父は将来、

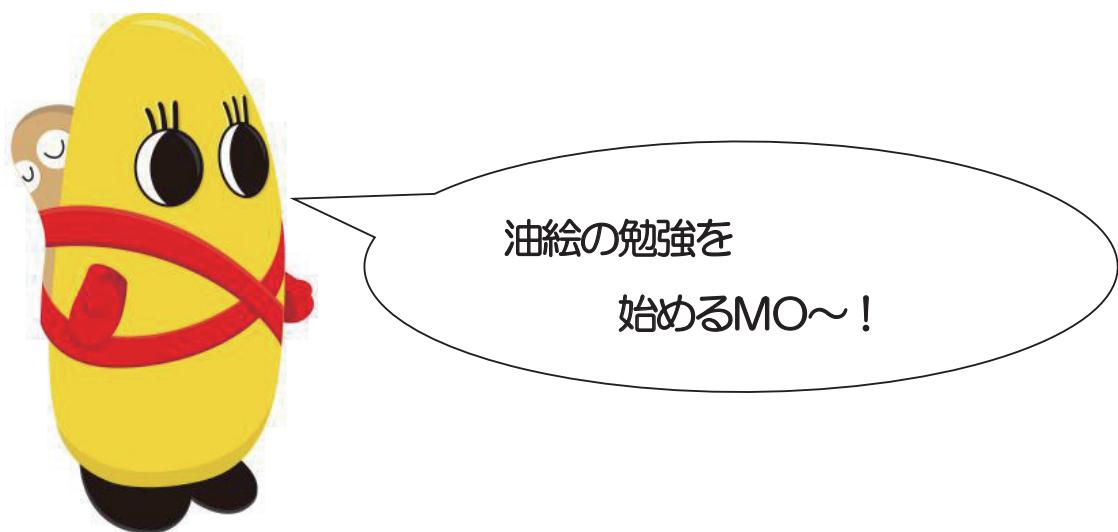
か  
ナヲを絵描きにしたいと考え、16才の時に仙台の井上東  
せん  
仙という画家の所へ連れて行き、3年間絵の勉強をしました。

いのうえ  
井上先生は画家として、日本画・洋画と全てのジャンル  
か  
で絵を描くことができました。そのため、日本画から油絵  
の西洋画まで全て習うことができました。

※9 漢学者

でんらい  
中国伝来の学問を研究する人

めいじ よこはま あしかが  
明治21年(1888)に横浜に出て油絵を始め、足利(※10)に  
たざきそううん  
帰っていた画家の田崎草雲(※11)に教えてもらおうと、家  
とちぎけん さの うつ  
族で栃木県の佐野(※12)に移り住みました。



油絵の勉強を  
始めるMO～！

※10 足利

げんざい とちぎけんあしかがし  
現在の栃木県足利市

※11 田崎草雲

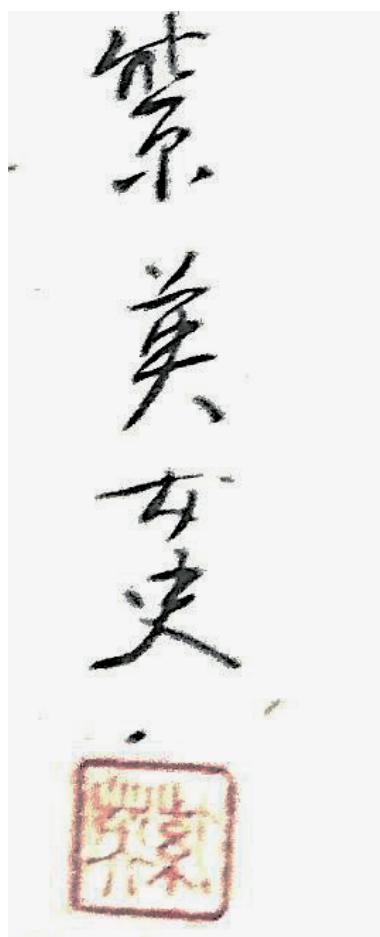
えど めいじ かつやく なんそう  
江戸から明治にかけて活躍した中国の南宋画家

※12 佐野

げんざい とちぎけんさのし  
現在の栃木県佐野市

# 「紫英」を名のる

22 才の時、日本画で「七福神」を描いて、井上先生に見ていただいた時に「この絵はよくできた絵だ。これからは紫英と名のり、絵にいれなさい。」と言われ、ためらつていると「私がこの紫英という名前をあげるから。」と言われ、それ以降は「紫英」と名のるようになりました。



たでぬま  
蓼沼ナヲ (紫英) のサイン



たでぬま しえい  
蓼沼ナヲ (紫英) 14才の時の作品



たでぬま しえい  
蓼沼ナヲ (柴英) 筆 犬 (油絵)



たでぬま  
蓼沼ナヲ (紫英) 筆 七福神の図

# 大和遠州流との出会い

---

めいじ

明治26年(1893)22才の時、佐野の旧家蓼沼勘七と結婚

めぐ

し、1男3女に恵まれました。

けっこん

結婚した時、蓼沼家には3人の男の子がいました。

けんどう

この子たちを教育するためには、剣道を習わせるのが良

かとういっしょう

けんどうしちだん

いと考え、加藤一照という剣道七段の先生に子どもたち

けいこたの

の稽古を頼みました。

けいこ

とつぜん

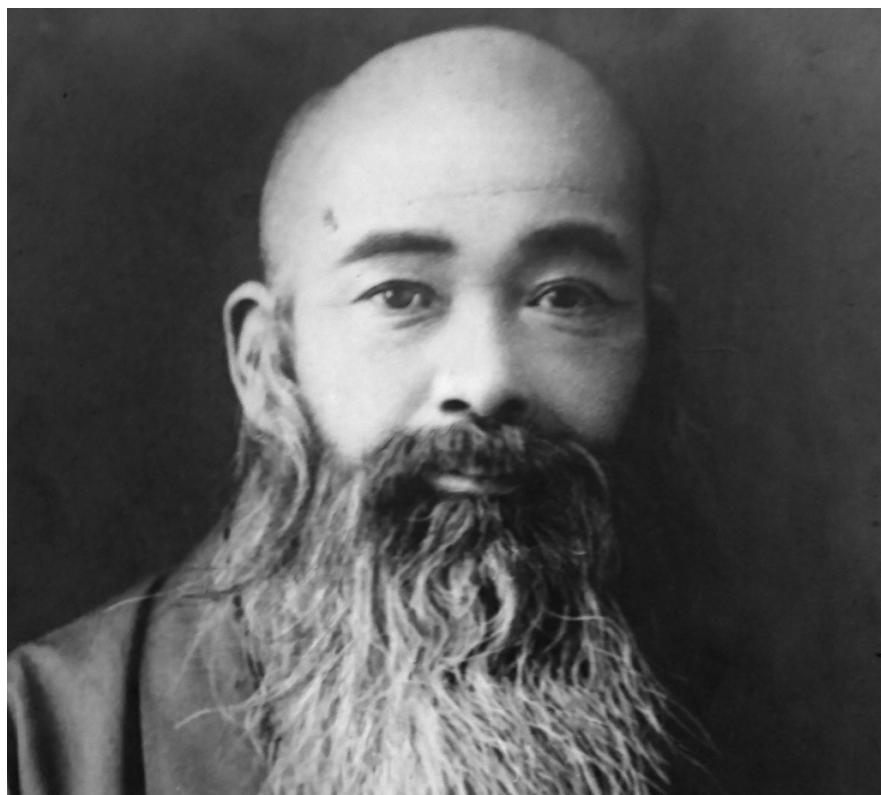
かとう

おく

するとある日、稽古の後突然、加藤先生が「奥さんお茶をやっていましたか。」と尋ねてきました。「貧しかったから、お茶はやっておりません。」と答えると「お茶をやりませんか。」と言われ、興味もありましたのでやってみることとなったのです。

かとう やまとえんしゅうりゆう  
しかし、この時は加藤先生が大和遠州流茶道家元第 17  
せいげつあん ゆめ  
代静月菴だとは夢にも思いませんでした。  
しどう かとう  
言われるままに、茶道の指導を受け、加藤先生の期待に  
こた  
応えていきました。

ころ おっとかんしち じゅんちょう かこ  
この頃は、夫勘七の事業も順調で子どもたちに囲まれ、  
す か じゅうじつ  
子育てをするとともに、好きな絵を描き充実した人生を  
送っていました。



せいげつあん かとういつしょう  
第17代静月菴 加藤一照

てんかんき  
人生の転換期

---

めいじ おっとかんしち せっかい  
明治42年(1909) 夫勘七は、57才で石灰の山を息子に  
ゆず いんきよ しかし、まだ40才にもなっていなかったナヲは隠居生  
譲り、隠居(※13)することとなりました。

まんぞく しかし、まだ40才にもなっていなかったナヲは隠居生  
活に満足することができませんでした。

ころ たでぬま しょうらいせい  
その頃、蓼沼本家では、将来性のある一族の者20人く  
らいに育英資金(※14)を出して学校に行かせていたのです。

うえの びじゅつ それで、ナヲは上野の美術学校(※15)が女子を入学させ  
るという話を聞き、行かせてもらいたいと頼みましたが  
「もう40才になるし、子どももいる。女に学問はいらな  
い」と言われ、泣く泣くあきらめました。

※13 隠居

しりぞ 第一線から退くこと

※14 育英資金

けいざいてき しょうがくきん  
主に経済的な理由により進学ができない人に出す奨学金

※15 上野の美術大学

とうきょうげいじゅく げんざい とうきょうげいじゅく  
東京芸術学校。現在の東京芸術大学の前身

しかし、まだ隠居などしたくないと考えたナヲは兄と弟のいる留萌で思い切り絵を描きたいと思い、子どもたちを連れて佐野をあとにしました。

子どもたちを連れた汽車の旅は大変なものでしたが、列車の堅い座席にゆられながら、これから向かう留萌の町を想像するナヲ一家でした。



ナヲの兄 日下部主計

めいじ

## 明治43年（1910）の留萌

ナヲがやってきた留萌は、にしんりょう　けいざい　ささ鰯漁が経済を支えていたのはもちろん、この年に3年がかりの鉄道工事が終わり、深川がわから留萌までとうとう鉄道が通じたのです。



当時の留萌の町並みまちなみ

その上、長かった留萌築港運動(※16)が実り、留萌築港の  
予算が2月の第2回帝国議会(※17)で可決され、4月から  
築港工事が始まったばかりでした。

留萌に港が  
作られるMO～！



明治43年（1910）頃の留萌川河口の様子

#### ※16 留萌築港運動

明治24年（1891）から始まった五十嵐綱治、億太郎親子を中心とした留萌の有志がくり広げた留萌に港を作るための運動

#### ※17 帝国議会

現在の国会

はってん やくそく  
留萌のこれから的发展が約束されているようで、町は活  
気にあふれていたのです。



# 留萌での生活

---

ナヲは、はじめ絵を描いて生活しようと想っていました。

しかし、当時の留萌はまだ田舎で、絵を描いて生活できるほど文化が熟していました。

それで、正覚寺のお嬢さんや、お医者さん、神主さんたち4、5人に茶道を教え始めました。

だんだんと評判になって、少しずつ鰯場の親方の子女たちが茶道を習い始めていきました。

日中は、雨の日も、風の日も、吹雪の日も茶道を教えに留萌のほか、増毛、鬼鹿、羽幌などへ出向き、夜は夜で茶道の研究を続けて、1日に3時間くらいしか眠っていなかったといいます。

# トミと一緒に

---

ナヲは佐野から留萌に来た時に3人の子どもを連れてきました。

しかし、蓼沼の本家ではナヲが頑張っているが、生活に  
ずいぶん苦労していると聞き、子どもがかわいそうだとい  
って、2人を父である勘七のもとに連れ返しました。

末っ子のトミだけは、まだ5才と小さかったので、ナヲ  
の元に残しました。

大正2、3年の頃、ナヲが増毛や旭川に教えに行って  
いる間、ナヲの父と母が留萌に来て、トミの面倒を見てい  
たといいます。

ナヲはそんな中でトミを育て、トミもその期待に応え、  
大正15年（1926）には小学校の先生となり、昭和16年  
(1941)まで<sup>つづ</sup>続けます。

昭和2年(1927)にはトミに増毛の舎熊から和田岩太郎  
を婿養子に迎え、2人の孫も授かりました。



大正時代の茶会

しかし、悲劇は突然訪れました。

昭和6年（1931）トミの夫岩太郎と2人の孫は亡くな  
ります。この年は、インフルエンザが日本中に蔓延し、全  
国で15,000人以上が亡くなりました。

ナヲとトミの悲しみは大変なものだったでしょう。

ナヲとトミは悲しみを忘れるべく、いっそう茶道の道と  
教師の道に進んでいったのです。



3人の死を乗り越え  
それぞれの道に進んでいくMO～！

けいしょう  
ナヲ家元を継承

しちょう じむしょ  
大正3年(1914)には、留萌には支庁や土木事務所など

かんこうちょう おくさまがた  
官公庁(※18)ができて、役所の奥様方が習いにきました。

ふ  
そして、だんだんと弟子も増えていきました。



けいこ  
稽古の様子

※18 かんこうちょう  
官公庁  
国や北海道などの役所

ましけ ほんまけ 増毛の本間家(※19)には、小さいけれど素敵な茶室があ  
り、よくお茶会に使わせてもらったそうです。

けんさん ふきゅう 茶道の研鑽と普及活動によって、大正5年(1916)には、  
せいげつりゅうせんぢやどう そうりつ 静月流煎茶道を創立するとともに、前年の悲しみを乗り越  
えて、昭和7年(1932)61才の時に、加藤一照第17代静  
げつあん やまとえんしゅうりゅう けいしょう せいげつかん 月菴より大和遠州流茶道家元を継承し、第18代静月菴と  
なりました。

やまとえんしゅうりゅう ほんきよ 北海道の留萌に大和遠州流茶道の本拠がおかれたので  
す。

※19 ほんまけ 本間家  
ほんま まるいち本間。現在の國稀酒造

## 留萌ホテルの坂道

ナヲの家は、留萌唯一のホテル、留萌ホテルの坂道の下  
にありました。

そこから漂つてくる文化の香りに留萌の少女たちはあ  
こがれました。



留萌ホテル（現在の留萌市本町1丁目）

ナヲの所に習いものに通うことは自慢の種になりまし  
た。茶道のほか、華道、謡曲、盤景などいろいろ教えて  
いました。

家の前を通過すると格子の窓から謡いの声が聞こえて、この  
場所だけは別世界のようだったといいます。



習いものに通う少女たち

せんそう  
戦争の時代へ

---

この頃、日本は太平洋戦争に突き進んで行き、地方の留萌も戦時色一色に染められていきます。

こんな中、ナヲはすすめられて火防衛生婦人会(※20)の会長になります。



かぼうえいせいふじんかい  
留萌火防衛生婦人会

※20 火防衛生婦人会

かさい でんせんびょう よぼう かんきょう かいぜん そしき ふじん  
火災、伝染病予防や生活環境の改善などを進めるために組織された婦人  
団体

せんそうきょうりょく 戰争協力のため、金品の供出(※21)などがあり、立場  
もはん 上模範とならなければならぬため、自分が好きで集めた  
そっせん 茶道具なども率先して供出していました。

ナヲにとっては、自分の身を切られる思いだったことで  
しょう。

むすめ 娘のトミは、昭和17年(1942)から町立留萌高等女学校(※22)の先生となり、昭和22年(1947)まで武道薙刀・  
いくじほけん さかどう 育児保健・茶華道を教えています。

※21 きょうしゅつ 供出

せいふ ようせい おう 政府などの要請に応じて、金品などを差し出すこと

※22 町立留萌高等女学校

昭和14年(1939)開校の留萌女子教育機関。昭和18年(1943)北海道  
いかん ちょうりつ きかん しんせい へいごう に移管し、庁立留萌高等女学校となる。その後、新制留萌高等学校に併合



町立留萌高等女学校の薙刀練習

せんそう 戦争が始まって、留萌に  
えいきょう 影響が出てくるMO～



むすめ けいじょう  
娘トミへ家元継承

---

せんそう 戰争も終わり、ナヲも70才を過ぎていきましたが、やまと  
えんしゅうりゅう つ 遠州流を継ぐ者が決まっていませんでした。弟子たちや  
身内からは娘のトミへ継承してほしいと言われています。  
むすめ けいじょう  
した。

しかし、ナヲはトミが教師を続けていたいという気持ち  
が強いことを感じていました。



たでぬま しそい  
蓼沼トミ (紫水)

トミはいろいろな人の意見を聞くとともに指導を受け、  
やはり自分が継ぐことが一番良いことだと思い、大和  
遠州流茶道の家元を継ぐことを決めました。

ナヲにとってこれ以上の喜びはなかったのです。

昭和 22 年 (1947) トミ (紫水) は大和遠州流第 19 代  
静月菴として家元を継承しました。

トミさんが大和遠州流の  
代表となる家元を継ぐことに  
なったMO～！



さかどうれんめいはなぶさかい けっせい  
**留萌茶華道連盟英会の結成**

---

今まで、茶華道の各流派は独自に活動を行っていました  
が、昭和 23 年 (1948) ナヲの提唱により、各流派の代表  
が集い、昔から伝承されている芸術の発展を図るため、  
お互いに協力をすることを目的として「英会」が結成さ  
れました。

「英会」の「英」は「紫英」の「英」をとったもので、  
初代の会長にはナヲが選出されました。



はなぶさかい  
**英会の新年会**

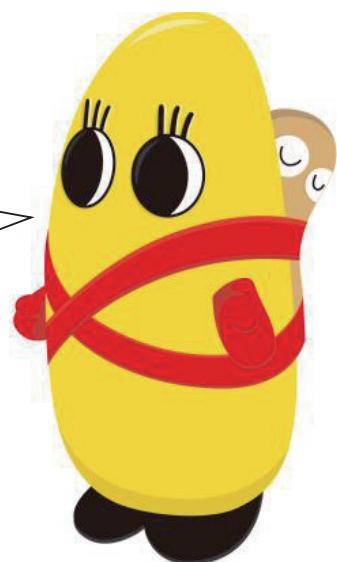
いこ う ごうどうてん かいさい  
これ以降、合同展の開催、市内での茶会、華展などの実施  
はなてん じっし

さか ど う はってん つ  
など、茶華道の発展に尽くしています。



昭和25年(1950) 第4回大和遠州流茶道温習會

さか ど う  
留萌の茶華道が  
はってん  
発展していくMO～！





茶会の様子



お寺での茶会（正覚寺）

しょう じゅしょう  
留萌市文化賞第一号受賞

---

昭和28年(1953)82才になったナヲは、留萌に来て以来、  
留萌の文化の振興に長年にわたり寄与したことから留萌  
市で最初となる留萌市文化賞を受賞しました。



しょうじゅよしき たでぬま しえい  
文化賞授与式の蓼沼ナヲ (紫英)

じゅしょう やまとえんしゅうりゅうさかどう ろっかくいけのぼうかどう さん  
受賞理由には「大和遠州流茶華道、六角池坊華道、三

さいりゅうばんけい ほそかわりゆうほんせき せいげつりゅうせんちやどう おうぎ きわ  
才流盤景、細川流盆石、静月流煎茶道などの奥義を究め、

よわい ゆうよさい しどう たん  
齢80有余歳、なおかくしゃく(※23)として斯道(※24)の探

きゅう う ようせい つと  
求に倦む(※25)ことを知らず、多数の門下生養成に努めた。

わか ころ かりゆう ちまた ふぐう じょせい  
若い頃、花柳の巷に不遇をかこつ女性(※26)などを集め、

さかどう きょうじゅ ふどう けんさん はげ  
茶華道の教授をして婦道の研鑽を励ましたことも人々の

知るところである。

れいほうきょうじゅ  
また、多年にわたり留萌高等女学校の礼法教授として  
つ こうし  
女子教育に尽くし、今日まで公私両面にわたる門下生は  
とうきょう ふくおか よにん  
東京、福岡まで含めて、5,000余人と言われている。

### ※23 かくしゃく

年をとっても、丈夫で元気の良い様子

### ※24 斯道

学問や技芸などで、この道、この分野

### ※25 倦む

いやになる、あきる

### ※26 花柳の巷に不遇をかこつ女性

家の事情で幼くして花柳界に入り苦労した女の人たち

めいじ いらい げいじゅつ しんこう のこ こうせき  
明治43年以来、留萌市の芸術、社会教育振興に残した功績」  
とあります。

なお、昭和30年(1955)84才の時には、全国社会教育  
こうろうしょう じゅしょう  
功劳賞を受賞しています。



ばんねん たでぬま しえい  
晩年の蓼沼ナヲ (紫英)

ねんがん

こてん

## 念願の絵の個展を開く

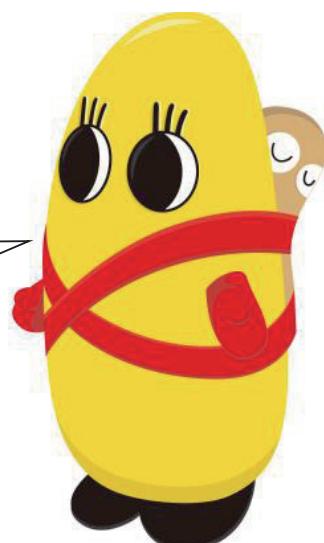
昭和 30 年 (1955) 留萌市文化協会の主催により、今まで描きためてあった絵の個展を開催しました。

ナヲにとっては、自分の一番好きな絵を市民に見てもらうことは、人生で一番幸せな時であったでしょう。

油絵、水墨画、水彩画、チョーク画など 38 点の作品が公民館に展示されました。一つ一つがナヲの思いを表した作品であり、人生そのものだったに違いありません。

ちなみに留萌で絵の個展が開かれたのは、この時が初めてでした。

ナヲさんの念願の  
夢が叶うMO～！





はじ  
こてん  
こうみんかん  
留萌で初めて行われた絵の個展（公民館）



てんじ  
展示の様子

# 大和遠州流の未来を見つめて

ナヲからトミへ引き継がれた大和遠州流は、20代となる後継者を探しておかなければなりませんでした。

そんな時、ナヲの次女チヨの次男瀬谷豊が子どもの頃からナヲ、トミに可愛がられ、稽古のため留萌に来ていました。

そして、豊からトミの養子(※27)になっても良いという話があり、ナヲは喜びました。

トミは「実の両親がそろっているのに、養子なんてかわいそうだ。困っている時に力になってくれれば良い。」と言つて、はじめは遠慮しました。

しかし、豊の並々ならぬ決意を知り、昭和33年(1958)にトミは豊を養子とし、後継者としました。

※27 養子

ほかの家から子どもをもらって、自分の子どもとすること

だいおうじょう  
**大往生**

---

昭和35年(1960) 7月31日、留萌のゑびす家(※28)で大和

えんしゅうりゅう せいけつりゅうせんちやどうかいあん しゅうねんきねん  
遠州流茶道・静月流煎茶道開庵 50周年記念大茶会が開

かれました。第19代蓼沼トミとともに90才になった第

たでぬま きねん  
18代蓼沼ナヲも記念写真の中に写っています。



昭和35年(1960) 静月庵開庵 50周年記念大茶会

※28 立てゑびす家

留萌市宮園町1丁目にあった料亭

翌年、ナヲは91才の天寿を全うします。

ふるさとから遠く離れ、留萌の文化を育んだ人生でした。

没後、昭和40年(1965)に北海道社会福祉協議会賞を贈  
られています。

娘のトミは母について「母は努力家で、根気強く、勤勉家でした。頭も良く、何でもできましたが、怠け心が嫌いで少しの暇でも良く働いていました。また、自分に厳しく、人にも厳しかったですね。母が亡くなる少し前に、生まれて初めて『おまえは良い子だった。正直な子であった……』とほめられた時、本当に子どものようにうれしかったですよ。」と話しています。

やまとえんしゅうりゆう  
その後の大和遠州流

ナヲのあとを継いだ娘トミは、29年間の教職生活をや  
め、茶道家元として茶道の振興に努め、札幌をはじめ全道  
5ヶ所に家元出張所を開くとともに、全国に9支部を  
設立し、茶道を全国に広めていきました。

トミのもと、教授資格者は350名を超え、教えを受けた  
門下生は数知れないといいます。



昭和63年（1987）頃の様子

ほ ご し さいばんしょちょうてい みんせい  
また、少年保護司、家庭裁判所調停委員、民生委員、  
社会教育委員など、いろいろな社会活動をしており、昭和  
51 年(1976)には北海道訪希(ギリシャ)文化交流団に  
さ か ど う さ ん か ほ う も ん  
茶華道代表として参加し、ギリシャを訪問しています。



こうみんかん かいさい  
公民館で開催された茶会の集合写真

昭和 52 年(1977)には、長年の文化活動の功績から母ナ  
フも受賞した留萌市文化賞を受賞しています。

昭和 62 年(1987)に、甥で養子の豊(一豊)に家元を譲り、  
それとともに大和遠州流の本拠を留萌から札幌に移しま  
した。



文化賞贈呈式の蓼沼トミ (紫水)

平成 25 年(2013)には、豊(一豊)から娘の望(一望)に  
家元が継承され、大和遠州流茶道 21 代・静月流煎茶道 4  
代家元静月菴の蓼沼望がナヲ、トミ、豊が北海道に根付か  
せた茶道の精神を引き継いでいます。



第 21 代家元 蓼沼 望 第 20 代家元 蓼沼 豊

## おわりに

---

めいじ  
明治、大正、昭和と女の人が、芸術や文化で生きてい  
くことが大変な時代に、蓼沼ナヲ、トミ親子がまだまだ文  
化が未熟な田舎であった留萌にやってきました。

とく  
特に留萌は鰯漁が最盛期で、文化とは無縁な荒くれ  
ぎょみん  
漁民たちの世界だったはずです。

しかし、少しずつ芽生えてきた文化の芽を大和遠州流  
茶道を通じて留萌の女の人たちに根付かせてくれたこと  
は、留萌人にとっては幸運なことでした。

留萌市がこの親子に留萌市文化賞を贈って讃えたこと  
は当然のことと思われます。

これからは女性が活躍する時代です。  
じょせい かつやく

留萌の女性もこの親子の生き方を参考に、時代をリード  
じょせい さんこう



こでん てんじ 個展に展示した絵と夢沼ナヲ(紫英)  
たでぬま しえい

## あとがき

---

蓼沼ナヲ、トミ親子の足跡をたどっていく時に、多くの  
方々に資料の提供などでお世話になりました。

20代家元蓼沼一豊氏、21代家元蓼沼一望氏には、写真  
の提供、思い出話を聞かせていただくななど、大変お世話に  
なりました。

最後となりましたが、感謝申し上げます。

この本が蓼沼ナヲ、トミ親子の留萌に残した足跡を未来  
永劫伝えていく一助になることを願っています。

著者識

## 【主要参考文献】

- ・留萌市 留萌市史 1970
- ・蓼沼紫水 静月流 煎茶道教本 1975
- ・留萌市民文化誌波灯作成委員会  
留萌文化の心を訪ねて① 前大和遠州流家元  
蓼沼紫水さん 留萌市民文化誌 波灯 創刊号 1988
- ・留萌市文化団体協議会 留萌文化史 1985



・留萌市文化団体協議会他 文連・文協30年史 1992

・留萌市文化団体協議会

息づく文化 一文協20周年加盟団体のあゆみー 1997

・大和遠州流茶道静月流煎茶道静月会留萌支部

開庵百周年記念誌 2010





たでぬま しえい  
蓼沼ナヲ(紫英)筆 おかめ

留萌百年物語  
蓼沼ナヲ物語

発行日	平成30年2月28日
編集者	留萌市教育委員会
著者	福士 廣志
発行	留萌市教育委員会
表紙	デザインスタジオ Aim
印刷・製本	三井印刷株式会社